

AUE Environmental Report

2023

愛知教育大学
環境報告書 2023



学長メッセージ	1
沿革の略図	2
各キャンパスの所在地・概要	3
運営組織等	4
【1】教育大学としての特色を生かした環境活動	
Pick up	6
大学教員の取組	8
附属学校園の取組	10
学生の取組等	12
【2】サステナブルキャンパスを目指して	
温室効果ガス CO ₂ 抑制状況	16
マテリアルバランス（環境負荷状況）	18
総エネルギー投入量の抑制	19
グリーン調達推進状況	20
水資源投入量の抑制	21
廃棄物排出の抑制	22

水質汚濁防止の取組状況	24
大気汚染防止の取組状況	24
化学物質取扱及び管理状況	25
PCB含有廃棄物の管理状況	25
水銀含有廃棄物の管理状況	25
美化活動・啓発活動	26
その他の活動	27
環境配慮の仕組み	28
環境報告書ガイドラインとの対照	29



愛知教育大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。



AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

愛知教育大学は、令和5年に本学の前身である「愛知県養成学校(明治6年設立)」から数えて150年の節目を迎えました。

愛知教育大学
公式マスコット
キャラクター



愛教ちゃん



エディ

大学の概要

報告対象期間・報告対象範囲



報告対象期間

2022年度 2022年4月1日～2023年3月31日
発行日 2023年9月

報告対象範囲

刈谷キャンパス …………… 大学・附属高等学校
名古屋キャンパス …………… 附属幼稚園・附属名古屋小学校・附属名古屋中学校
岡崎（六供）キャンパス …………… 附属岡崎小学校・附属特別支援学校
岡崎（栗林）キャンパス …………… 附属岡崎中学校

参考とした ガイドライン

環境省「環境報告ガイドライン（2018年版）」
環境省「環境報告書の記載事項等の手引き」
環境省「環境報告書に係る信頼性向上の手引き」

愛知教育大学 環境方針について

I 環境理念

国立大学法人愛知教育大学は、日々の教育研究活動をはじめとする本学の諸活動を通して、地球環境への配慮や省エネルギーの努力を続け、環境保全や持続可能な社会の構築への貢献などの社会的役割を果たします。

また、教育の総合大学として、高い学識と教養を身に付け、環境問題に理解があり、環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある子どもたちの教育を支え、持続可能な社会の実現に貢献できる専門職の育成に努めます。

II 環境方針

本法人の基本理念に基づき、全ての構成員が協力し、以下の活動を積極的に推進します。

1. 環境に対する豊かな感性や見識を持った専門職を育成し、持続可能な社会の実現につながる環境教育と研究の推進に取り組めます。
2. 環境関連法令等を遵守し、環境への負荷を正確に把握するとともに、省エネルギー、省資源、廃棄物の削減、資源の再利用等に係る目標を設定し、その実現に努めます。
3. 環境保全活動などの情報の公開を行い、地域社会と連携を図りながら、地域環境や地球環境の保全、改善に貢献します。

2017年3月13日制定



学長メッセージ

国立大学法人愛知教育大学

学長 野田 敦敬

「環境報告書2023」をご覧の皆さまへ

本学は、一つの国立大学法人として特定事業者の指定を受け、「環境報告書」を発行し、今回で17冊目となります。「環境報告書」とは、事業者（企業、団体、学校等）が、自らの事業活動によって生じる環境負荷や環境に対する考え方、取り組み等を社会に対して定期的に公表するものです。公表によって、地域の方々や学生、教職員の皆様に本学の取り組みを理解していただき、今後の環境保全や環境対策に協力していただくことを願っています。

2021年3月に本学の新たな中長期ビジョンとして、3つの目標と9つの戦略からなる「未来共創プラン」を策定し、取り組みの一つに「子どもキャンパスプロジェクト」を掲げました。子どもキャンパスプロジェクトでは大学及びその周辺地域を「学び」と「遊び」を一体化できるエリアとし、本学の目指す「子どもの声が聞こえるキャンパス」「地域から頼られる大学」の実現を進めています。2022年度は11月に第2回「あつまれ！子どもキャンパス in 愛知教育大学」を開催しました。「切って繋げるバンブーロード」として本学附属高校の生徒とともに竹の伐採、枝きり、玉きりや竹割りなどの竹林整備活動を始め、竹チップでカブトムシを育てよう～冬の幼虫探し～、バンブーランタンの作成、馬術部員の指導のもと乗馬体験など、キャンパス内に自生している竹や学生の課外活動を子どもたちの自然体験に活かすことで、大学のリソースの再発見に貢献するとともに、将来を担う子どもたちや地域に対して、自然環境や人間と自然との共生について考え与える機会となりました。



バンブーロードでの竹割の様子



カブトムシの幼虫を観察

本学は、1970年に刈谷の地に移転統合を果たしてから自然豊かな環境が維持されていて、自生の竹・樹木が大変豊かな環境となっていますが、そのなかでも近年の学生の自然体験不足といった教育的課題に加え、落葉による建物屋上や道路側溝の排水の詰まりによる漏水、また自生林の倒木による建物等の被害といった樹木管理への対応が、ますます重要な課題となっています。これらの課題への対応として、安全を維持しつつ、以下のとおり『グリーンキャンパス』の実現に向けて取り組み、共創の理念を浸透させていきたいと思っています。

『グリーンキャンパス』の実現に向けて

- ① 快適な学習環境・職場としてのキャンパス
- ② 自然の営みを学べるキャンパス
- ③ また来たくなる歴史を感じる美しいキャンパス
- ④ SDGsの理念にも合致したエコキャンパス

沿革の略図

明治6年12月
愛知県養成学校

明治9年8月
愛知県師範学校

明治19年8月
愛知県尋常師範学校

明治31年4月
愛知県師範学校

明治32年4月
愛知県第一師範学校

明治45年4月
愛知県女子師範学校

明治32年4月
愛知県第二師範学校

大正7年3月
愛知県農業補習学校教員養成所

大正10年4月
愛知県実業教員養成所

大正12年4月
愛知県岡崎師範学校

昭和10年4月
愛知県立青年学校教員養成所

昭和18年4月
愛知第一師範学校

昭和18年4月
愛知第二師範学校

昭和19年4月
愛知青年師範学校

昭和24年5月
愛知学芸大学

名古屋分校

豊川分校

安城分校
昭和27年3月廃止

岡崎分校
昭和25年4月移転・改称

昭和41年4月
愛知教育大学

名古屋分校

岡崎分校



教育交流館(現在)

昭和45年4月
刈谷市に統合移転

昭和53年6年 大学院教育学研究科
昭和62年4年 総合科学課程
平成12年4年 教員養成4課程、学芸4課程



附属図書館, 教育・人文棟(現在)

平成16年4月
国立大学法人
愛知教育大学

平成19年4年 現代学芸課程
平成20年4年 大学院教育実践研究科
平成24年4年 大学院教育学研究科 共同教科開発学専攻(後期3年博士課程)
平成29年4年 教育支援専門職養成課程
令和3年4年 学校教員養成課程



刈谷キャンパス(昭和45年頃)



刈谷キャンパス(現在)



第一共通棟(昭和45年頃)



第一共通棟(現在)



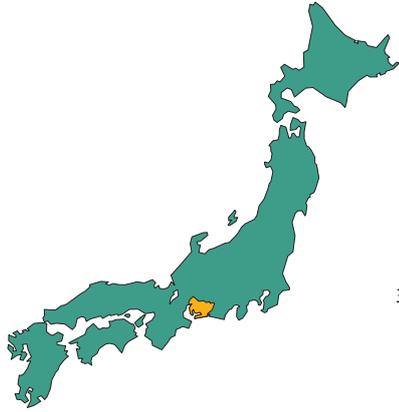
教育・人文棟(昭和45年頃)



教育・人文棟(現在)



各キャンパスの所在地・概要



①刈谷キャンパス

愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1



土地	488,136㎡
建物	98,887㎡
構成員	
教職員	383人
学部学生	3,726人
大学院学生	240人
専攻科学生	27人
附属学校生	355人
計	4,731人

②名古屋キャンパス

愛知県名古屋市中区大幸南1の126



土地	55,228㎡
建物	15,864㎡
構成員	
教職員	76人
附属学校生	1,149人
計	1,225人

③岡崎(六供)キャンパス

愛知県岡崎市六供町八貫15



土地	64,348㎡
建物	11,730㎡
構成員	
教職員	58人
附属学校生	606人
計	664人

④岡崎(栗林)キャンパス

愛知県岡崎市明大寺町栗林1



土地	21,397㎡
建物	6,546㎡
構成員	
教職員	28人
附属学校生	434人
計	462人

その他 研究施設等

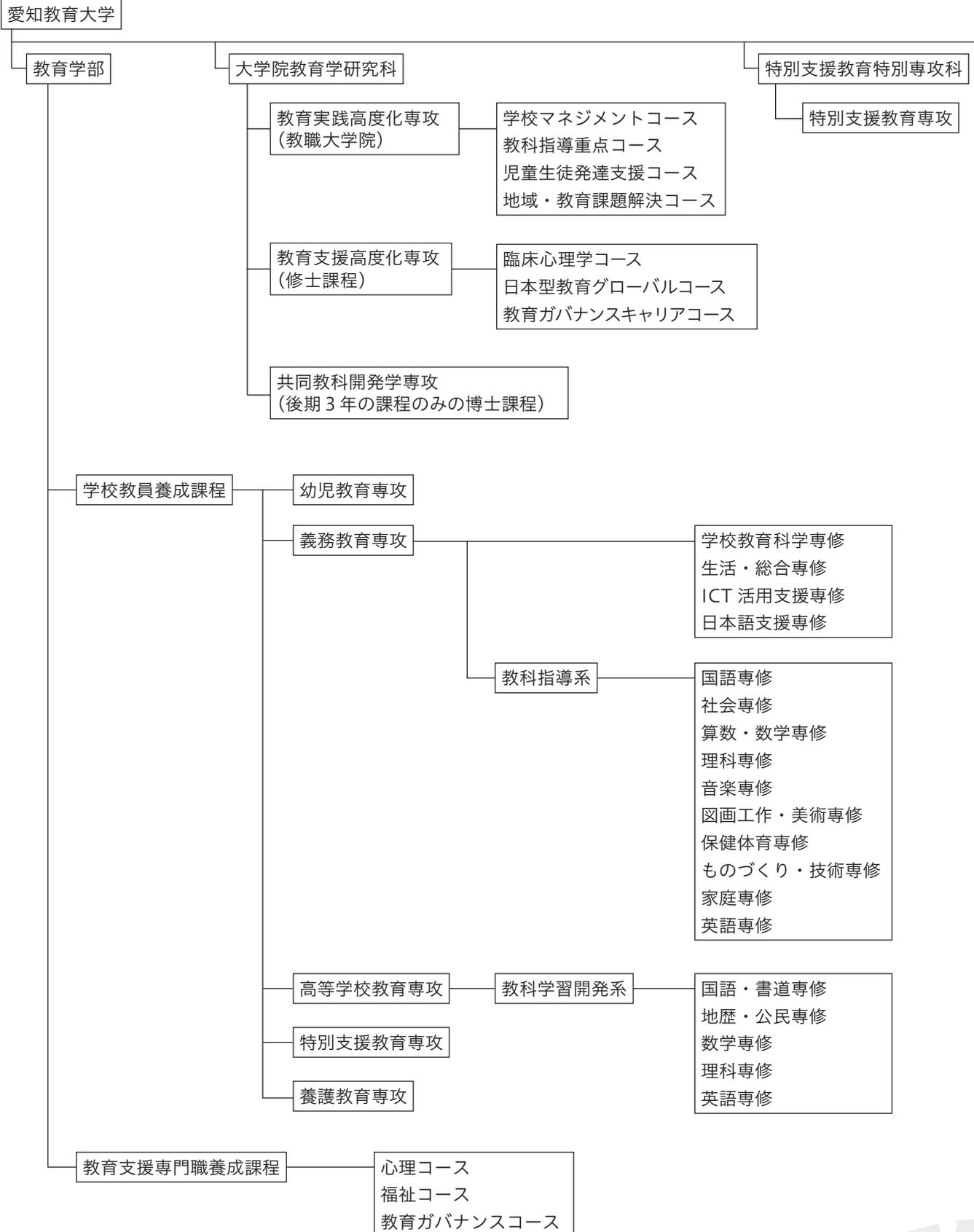
生駒野外実習地

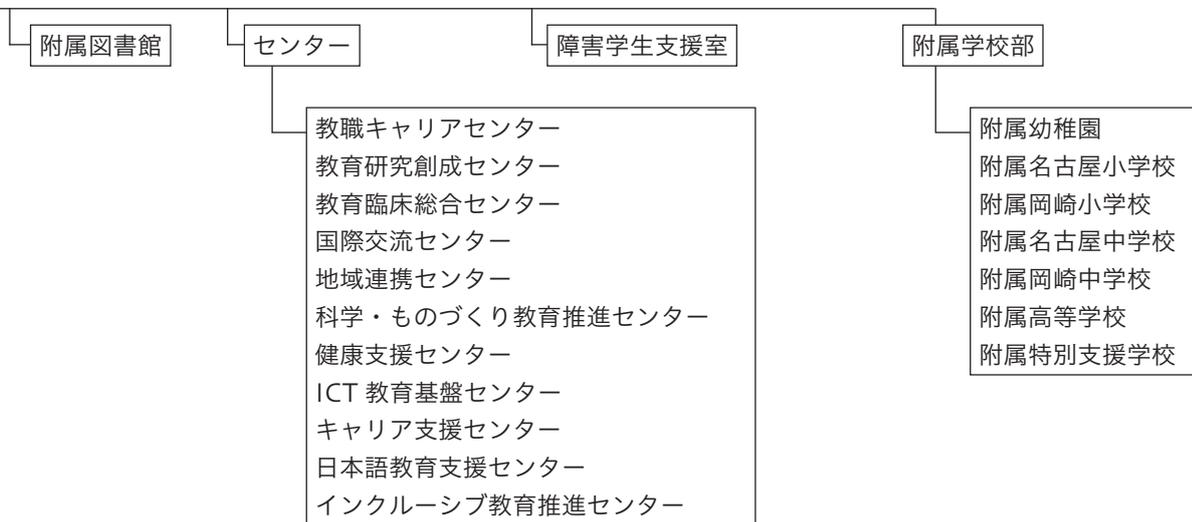
土地	7,357㎡
----	--------

全キャンパス

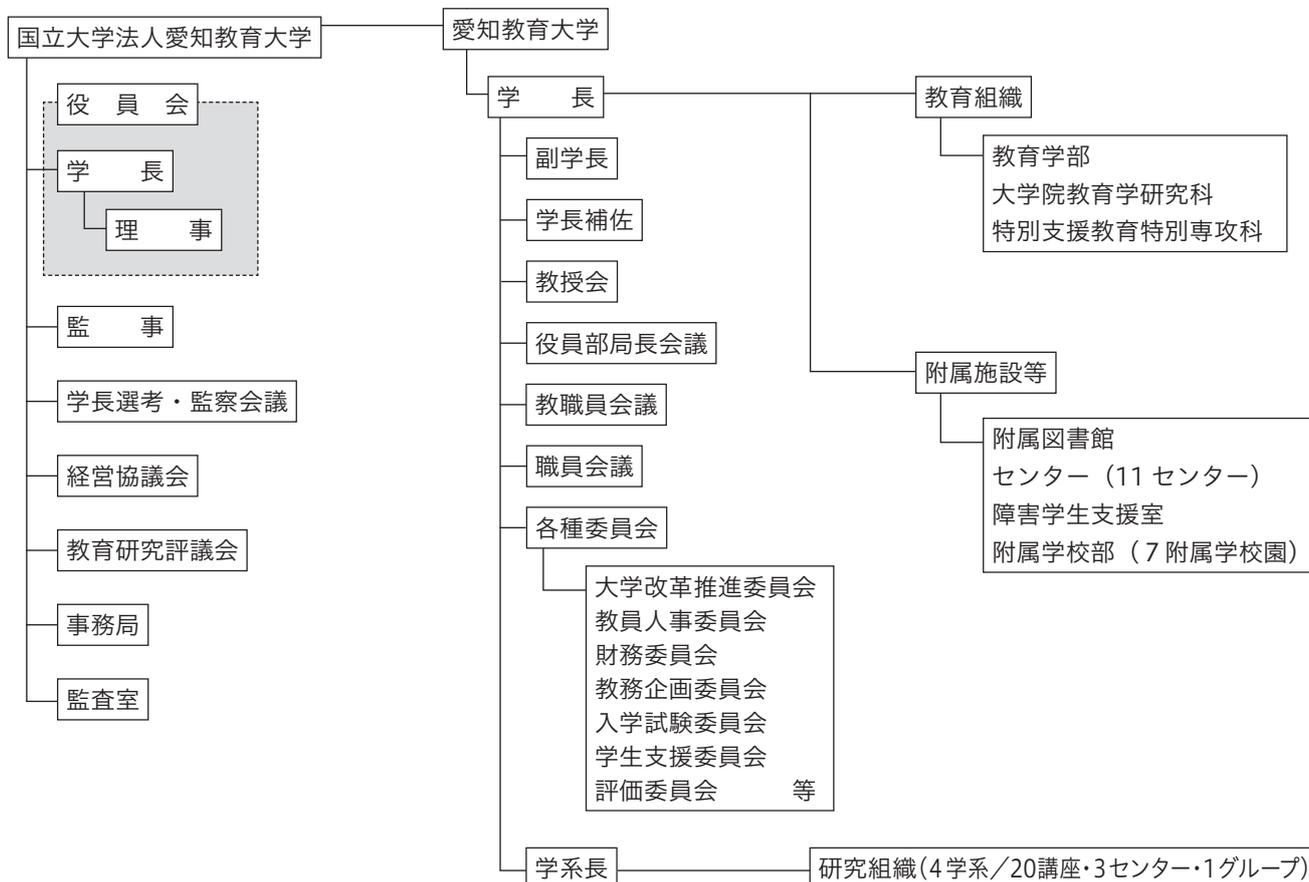
土地	636,466㎡
建物	133,027㎡
構成員	
教職員	545人
学部学生	3,726人
大学院学生	240人
専攻科学生	27人
附属学校生	2,544人
計	7,082人

教育組織





運営組織



1

教育大学としての特色を活かした環境活動



Pick Up

Pick Up 1 本学のカーボンニュートラル達成に向けての取組

施設課

2020年10月、政府は、2050年までに温室効果ガスの排出量をゼロにする「カーボンニュートラル」を目指すことを宣言し、さらに2021年10月、業務その他部門において2030年度までに温室効果ガスの排出量を51%削減（2013年度比）とする目標を掲げました。本学においても、2030年度までに温室効果ガスの排出量51%削減、2050年までにカーボンニュートラルの達成を目指し、引き続き環境への取組を進展させます。本学では2022年度までに、温室効果ガスの排出量を約30%削減（2013年度比）することができました。

効果的に温室効果ガスを削減するためには「エネルギー使用量の削減」が不可欠です。本学では、大学施設の中長期的計画（キャンパスマスタープラン等）において、温室効果ガスの排出量削減に直結する「省エネルギーへの取組」を、全学的な優先的課題に位置付け、「建築物の省エネルギー化」や「省エネルギー啓発活動」等を推進しています。建築物の省エネルギー化では、建物整備時（大規模改修等）において、積極的な省エネ機器の導入・建物の断熱化を行っており、2022年度に実施した「音楽棟」改修では、BEI値（設計一次エネルギー消費量/基準一次エネルギー消費量）において0.43（設計一次エネルギー消費量57%の削減）を実現し、「ZEB Ready」を達成しました。カーボンニュートラルの達成に向け、建築物の省エネルギー化に配慮した施設整備を今後さらに加速させます。

また「2050年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略（2021年6月）」においては、人材育成や研究開発を速やかに推進することを求められ、初等中等教育にて「環境教育の充実」を図ること、また、地域社会との連携にて「知の拠点」化を強化し「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション※」等を推進することが明記されました。「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション」は、5つのワーキンググループ（WG）で構成されており、本学の特色ある教員養成の教育研究活動やその発信を高める場として、本学は2021年度より「人材育成WG」に参加し、カーボンニュートラルに係る人材の在り方や教材開発について情報共有しています。



図 本学の温室効果ガス排出量の推移と削減目標ロードマップ



建築物ZEB化の認証証

※参考HP：カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション
<https://uccn2050.jp/>



音楽棟外観



省エネ整備状況 (LED照明)



省エネ整備状況 (高効率空調)

Pick Up 2

地域連携フォーラム2022『地域と考える未来共創—SDGs実現のために—』を開催

地域連携課

地域連携センターでは、毎年テーマを決めて「地域連携フォーラム」を開催しています。2022年は、「地域連携フォーラム2022『地域と考える未来共創—SDGs実現のために—』」と題して、6月25日（土）に刈谷市産業振興センターにおいて開催しました。

フォーラムでは、「持続可能な社会を構築するための協働のあり方について」をテーマに本学のAUEパートナーシップ団体SAGA（サーガ）の司会のもと、ステークホルダーである刈谷市内の企業、教育機関、自治体の各界から、株式会社豊田自動織機、角文株式会社、愛知県立刈谷北高等学校、刈谷市、来賓に刈谷市教育委員会 金原宏教育長をお招きし、実践発表とパネルディスカッションを行いました。

SAGAはSDGsの普及・啓発を教育面から推進することを目的に活動している団体で、本フォーラ



ムでは司会のほか、パネラーの一員としても参加しました。パネルディスカッションでは「今後どのようにしてSDGsを進めていくか」をテーマに議論し、参加者からも多くの意見や質問が飛び交い、会場が一体となってSDGsについて考えました。

当日は、教育関係者、自治体職員、企業など各方面から多数の参加があり、「自分でもできる小さいことでも、心がけていくことが必要だと思いました。また、地域社会全体で取り組むことが大切だと改めて思いました。」などの感想があり、参加者一人一人がSDGsや地域連携について深く考えることができた有意義なフォーラムになりました。



Pick Up 3

「持続可能な開発のための教育：SDGs実現に向けて(ESD for 2030)」への取組

地域連携課

本学では、2022年度に文部科学省の補助事業「SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業」に採択され、一般社団法人SDGsコミュニティと共に「ESD for 2030」TOKAIプロジェクトを実施しました。

ESD(Education for Sustainable Development)とは、持続可能な社会の創り手を育む教育です。2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で日本が提唱した考えであり、ユネスコを主導機関として国際的に取り組まれてきました。国内においては、2017年から順次各学習指導要領にも取り入れられ、その全体の内容に係る前文及び総則において「持続可能な社会の創り手」の育成について掲げられています。

本プロジェクトは、愛知、岐阜、三重の各県の小学校、中学校、高等学校、大学の各教員のほか、大学生が参加し、SDGs達成のための教育であるESDが多様に実践され、児童生徒が「持続可能な社会の創り手」として育成されることを目標に、授業づくりのための研究会や実践、研修会を重ねてきました。そして、その成果を発表する場として、2023年1月28日(土)に「ESD for 2030」TOKAIプロジェクト



成果フォーラムを開催しました。

フォーラムでは、ESDの研究発表の後、プロジェクト参加者と当日の来場者が一緒になってグループセッションを行い、ESD実践の充実のための理解と議論を深めました。

研究会の参加者からは、「ESD実践のため大変充実した機会となった。次回もぜひ参加したい。」と継続を望む意見が寄せられました。本学は今後もSDGs達成のためのESD授業実践の充実に向けサポートを続けていきます。

大学教員の取組

大学教員の専門分野を活かした環境教育活動及び地域貢献活動について報告をします。

中部電力パワーグリッドと連携した次世代エネルギー・環境教育活動 社会科教育講座／阿部亮吾

本学では、2017年3月に（現）中部電力パワーグリッドと連携協定を締結し、次世代エネルギー・環境教育に力を入れてきました。2019年度以降は本学の企業体験活動の一部に組み込まれ、学生の選択必修科目の1つになっています。2022年度も12名の学生が参加し、名古屋市教育委員会主催の「名古屋土曜学習プログラム」（写真1）にて、名古屋市内の小学生に発電の実験や電気の流れを教える講師を務めたり、でんきの科学館では来館した子どもたちに「おもしろ実験ショー」（写真2）を披露しました。また、本年度は静岡県内の「浜岡原子力発電所」（写真3、※発電所内は撮影禁止のため浜岡原子力館の写真に掲載しています）を施設見学

先とし、普段立ち入ることのできない発電所内部を歩いて、徹底した津波対策の様子を見るとともに、日本の将来の電力供給の在り方を学ぶ良い機会となりました。2022年度の活動に参加した学生からは、「日本のエネルギー事情について子どもたちに伝えることの大切さ」を意識したといった声が聞かれ、また中部電力パワーグリッド名古屋支社長からも「学生と子どもたちの双方が楽しんでいる様子だった」（『電気新聞』2022年7月21日付）との言葉をいただき、学校教員を目指している学生にとっても学びと成長の機会になりました。



写真1「名古屋土曜学習プログラム」の様子
(名古屋市内小学校にて、2022年6月18日撮影)



写真2「おもしろ実験ショー」の様子
(でんきの科学館にて、2022年7月9日撮影)



写真3「施設見学会」の様子
(浜岡原子力館にて、2022年5月21日撮影)

キャンパス内の自然を生かしたネイチャ・フィーリングの試み 特別支援教育講座／青柳まゆみ

ネイチャ・フィーリングとは、(公財)日本自然保護協会が進める自然観察の手法です。「五感で自然を感じよう」というコンセプトを特に大切にしているこの観察会を、私が担当する授業やオープンゼミで実施しています。

まず、五感をフルに使って自然を感じるとはどういうことかについて、リーダーが用意したいくつかのアイテムの観察と、その感想を言葉でやり取りする活動を通して学びます。例えば、1枚の葉を手にとって丁寧に調べてみると、葉全体の形だけでなく、葉脈の付き方や繊維の太さ、鋸歯の有無、匂いなど、様々な特徴があると分かります。



木の幹の温度を感じている様子

また、木の幹を手のひらで包み込むようにして触ると、温かく感じる木と冷たく感じる木があることに気づきます。

その後、いくつかのグループに分かれて「お薦めのアイテム」を探す活動をすると、若葉の柔らかさや異形葉、たくましく生長する植物など、学生一人ひとりが発見者となり、自然の面白さや不思議と熱心に向き合う姿が見られます。

このような、視覚以外の感覚を積極的に使いながら行う観察会を、自然豊かな愛知教育大学のキャンパスでこれからも続けていきます。



木の葉の特徴を詳しく調べている様子

「子どもキャンパスプロジェクト」の取り組み

保健体育講座／縄田亮太

2022年12月11日（日）、愛知教育大学未来共創プラン戦略1「子どもキャンパスプロジェクト」の取り組みとして、井ヶ谷子ども会・西境北東子ども会・豊明クリスマス会を実施しました。井ヶ谷町子ども会77人（子ども66人、大人11人）、西境北東子ども会19人（子ども13人、大人6人）、豊明から11人（子ども8人、大人3人）、大学から16人（学生12人、教職員4人）の合計123人が参加しました。

このプロジェクトは大学およびその周辺地域を『学び』と『遊び』を一体化できるエリアとして、教科等横断的な実践フィールドと実践プログラムを提供するものです。第4期中期目標・中期計画期間（令和4～9年度）に正式な事業として開始するもので、その一環でした。

子どもたちは低学年（未就学児と1～3年生）、高学年（4～6年）の2グループに分かれて、3つのプログラムを体験しました。マジックショーは全員で、科学実験とスポーツは第1体育館、第2体育館、武道場などでそれぞれを楽しみました。なお、今回は公開講座の親子運動遊びもコラボでき、大変好評でした。参加した子どもたちや保護者からは「やったことないことができてよかった」「また行きたい」「いろいろなことができてたのしかった」「遊びによって違うから楽しかった」「色々なスポーツが出来るからよかった」「お友達が増えるから。機会があれば是非お願いしたい」「大学生と交流するのは子どもたちにいい影響があると思う」などの感想が寄せられました。



トヨタ車体のビオトープのふれ愛パークでの自然体験

理科教育講座／常木静河

教師教養科目のひとつとして、刈谷北部のトヨタ車体にあるビオトープ「ふれ愛パーク」を学習の場とし、身近な自然環境の中で、生き物を捕まえてみたり、観察したりしました。トヨタ車体環境部志水剛様より、トヨタ車体が行っている環境保全活動についてのレクチャーを受けたり、当日ビオトープを案内して頂いたりしました。その後、学生さんたちは、捕虫網や虫かごを片手に、水辺や雑木林で、アゲハチョウやメダカなど複数の生き物を捕まえてじっくり観察したり、図

鑑で名前や生態を調べたりすることで生き物観察のスキルを磨いていました。様々な分野から学生さんたちが参加してくれていたため、生き物のスケッチなどが上手だったり、丁寧に図鑑の写真を見て、正確に種同定を行っていたり分野ごとに楽しみ方が様々でした。さらに、卒業生で刈谷市北部の自然について調査をしていた白鳥秀一さんが参加してくれて、自然観察や地域の自然について解説をしてくださいました。



作業風景1



作業風景2



作業風景3

附属学校園の取組

附属学校園の環境教育活動及び地域貢献活動について報告をします。

令和4年度附属特別支援学校における環境教育の取り組み

附属特別支援学校／星野恭彦

本校では、小学部から高等部まで環境教育の一環として、野菜や果物の栽培活動や生物に触れる活動を行いました。

小学部では、ナスやトマトなどを育てました。自分から水やりをする子どもの姿が多く見られ、たくさんの野菜を収穫することができました。少しずつ大きくなる野菜を見て、うれしそうに水やりをする子どもたちの姿が印象的でした。

中学部では、遠足で南知多ビーチランドや竹島水族館に行きました。館員の方から海の生物の生態について話を聞いた後、様々な生物の体に触れました。生徒たちは、生物の種類による触感の違いに驚きの声を上げていました。

高等部では、作業学習で、夏にナツミカンやオクラ、秋にはカキやサツマイモ、冬にはダイコンやカラタチなどを育てました。収穫後には保護者や職員に販売をしました。栽培活動を通して、野菜や果物を育てることの大変さと難しさを学びました。また、本年度は、海の生物を通して環境問題についても考えました。普段食べている身近な魚などの海の生物について事前学習をした後、生命の海科学館や名古屋水族館へ行き、海に関する環境問題や生態系について館員の方

ら話を聞きました。生徒たちは、自分たちの生活が生物や環境と深くかかわっていることを実感しました。

今後も、植物の栽培や生物についての学習を通して自然とのかかわり方を学ぶ環境教育を、児童生徒の実態に応じて効果的に取り入れていきたいと考えています。



実現 カーボンニュートラル

附属岡崎中学校／内藤恵三

1年生の社会科では、自動車産業における日本のカーボンニュートラルの実現について考えました。近年、EVが話題となっていますが、学校の周辺で実地調査を行ってもあまりEVは見られませんでした。一方、ヨーロッパでは日本をはるかに上回るペースでEVの普及が進んでいます。その理由を調べると、人々の環境に対する意識の高さや企業の取り組みの違い、各国の規制が日本よりも厳しいことに気づきました。しかし、日本とヨーロッパでは条件が異なる点が多く、急速にEV化を進めることは難しいと考え、「日本はどのようにカーボンニュートラルを進めるべきだろうか」という問題を持ち、追究しました。

追究していく中で、あるグループは、日本は火力発電に依存しているため、車両製造や電気をつくる過程でEVは燃料電池車やハイブリッド車よりも実質的な二酸化炭素排出量が多くなることに気づきました。そこで、企業に取材をし、燃料電池車の魅力と課題について知りました。個人追究後の話し合いでは、「発電方法を見直す」、「国がもっと強力で政策を推し進めるべきだ」「燃料電池車を普及させるべきだ」などさまざまな意見が出されましたが、最終的に、「時間がかかっ

ても日本の技術力を生かしたカーボンニュートラルを進めるべきだ」という結論に至りました。

単元を終えてある生徒は、「免許を取ったら環境に配慮した自動車を選択したい」と感想を書きました。自動車をきっかけにあらゆる場面で環境に配慮できる人になってもらいたいと思います。



SDGsの視点を意識した宿泊行事「小豆島の生活」

附属名古屋中学校／八木龍一

本校の総合的な学習の時間では、生徒が取り組むべき現代的課題であるSDGsの視点を意識した取り組みを行っている。SDGsの視点については、1年生時に「SDGsについて知る」、2年生時に「SDGsについて深める」、3年生時に「SDGsについて自分の考えを発信する」というそれぞれの段階を経て総合的な学習の時間に取り組んでいる。その中でも代表的な活動として、生徒自身にとって身近な問題から課題を発見し、その追究を行うFW（フィールドワーク）という活動がある。

2年生時に行われる宿泊行事「小豆島の生活」では、事前に自らの興味・関心に基づく社会的な問題をテーマに課題を設定し、小豆島での課題追究を想定した事前学習を行った。



その際、自ら立てた課題がSDGsのどの視点（パレット）に関するものかを吟味し、自らの課題を解決するための仮説を考え、SDGsの視点で追究・解決を図ることができるように計画を立てた。次に、実際に現地を訪問することで現地調査を行った。現地調査を行う中で、生徒は自らの仮説が正しかったと捉えたり、現地で初めて知ることとなった新たな視点が増えたりと、学びを深めていく姿が多く見られた。

事後の学習では、仮説検証についてまとめ、追究成果発表会という形で、他のテーマや訪問先の仲間、保護者等に追究の成果を表現することができた。



ビオトープによる「環境を通して行う教育」

附属幼稚園／水谷幸子

自然豊かな附属幼稚園に、令和3年度の大規模改修により新しい『ビオトープ』がつけられました。今回はビオトープ・ネットワーク中部の専門員のお力をお借りし、池の中の生物はもとより、池の中や周りの植物も在来種や地域に生息するものにし、より地域性を感じられるビオトープを目指して進めてきました。そして、子どもたちが楽しみにしていた池への生き物を放つ日。専門員の方に来園していただき、まずは『ビオトープとはいろいろな生き物が一緒に生きている場所』という内容のお話をお聞きし、子どもたちは真剣な表情でお話に聞き入っていました。そして、地域の田んぼなどから採ってきていただいたヤゴやドジョウを子どもたち自身で池に放流しました。その後、夏には池から出てきたトンボが羽化するところを間近で見ることができるなど、子どもたちにとって楽しみながら自然観察の場であり、実体験ができる場となっています。

子どもは、身近な人やものなどあらゆる環境からの刺激を受け、体験経験の中

で様々なことを感じたり新たな気づきを得たりしています。そしてこれらは後の学びの基礎となり、小学校以降の学習場面で生きてくると考えます。今後もより豊かな「環境を通して行う教育」の実践ができるよう努めていきたいと思っています。



学生の取組等

課外活動等による環境教育活動及び地域貢献活動について報告をします。

人・地球との共生を考えるゴミ拾い

新型コロナウイルスが流行している状況下においても、障害者と一緒楽しめるイベントを行う団体として、障害者と一緒考えた企画です。当事者の「普段生活している街を清掃し、地域貢献がしたい」という声を受けて、年に数回行っています。刈谷駅周辺で行いました。ゴミを拾いながら、各チーム指定された別々の目的地に向かいます。拾ったゴミに対してポイントがつき、より高得点のポイントをとったチームが優勝という内容です。この企画を通して感じたことは、3つあります。1つめは、障害がある＝マイナスではないということです。車椅子の方は目線が低いので、いち早くゴミに気づくことができます。2つめは、ゴミ拾いで得られる達成感です。たくさんのゴミが落ちていたことに驚きました。ゴミを拾うことで、街が綺麗になり、綺麗になった街を見るととても嬉しい気持ちになりました。3つめは、仲が深まることです。会話を通じて、互いを知ることができました。ゴミ拾いに参加しなければ、生まれなかった繋がりがあること

共生のための語り合いサークル「リアル。」／山田紋弓

に気づきました。この企画は、障害者への理解が深まり、新しい繋がりが生まれるだけでなく、環境についても考える機会になりました。評判の企画なので、今後も続けて行っていきます。



人とのつながりから始めるSDGs

学生団体SAGA／初等教育教員養成 理科選修／市川佳依

私たちは2020年度から、愛知教育大学 学生団体 SAGA (サーガ)として、持続可能な開発目標である「SDGs」の普及・啓発活動に取り組んでいます。学校への出前授業や企業が主催するイベントへの出展など、たくさんの活動を行いました。出前授業では、愛知県内の小学校を訪問しました。授業では私たちが開発した教材「SDGs まちづくり」や「SDGs かるた」を活用し、様々な建物とSDGsのつながりや、SDGsそのものの学びを体験してもらいました。子どもたちは、楽しみながら教材を体験しており、ワークシートの振り返りでは、SDGsについてしっかり学べている様子が見られました。また、イベント出展では、イベントに来場されたお客様に、出前授業で用いた2つの教材に加えて、神経衰弱を楽しみなが

ら生物模倣を学ぶことができる「バイオミミクリー」や、生態系について学ぶことができる「生態系8並べ」も体験していただきました。親子で参加してくださった方や、同じイベントに出展していた企業の方などから、教材について「おもしろい!」「よくできているね!」という大変ありがたいお言葉をたくさんいただきました。これらの活動を通して、子どもたちにSDGsを伝えるにはどのようにしたら効果的なのか、実践的に学ぶことができました。今後も、未来の地球を背負っていく子どもたちにSDGsの大切さを伝え、持続可能な社会の担い手の育成を推進していきたいと考えています。



井ヶ谷町内運動会への参加

かきつばたの民／特別支援学校教員養成課程 4年／白崎祐理子

「かきつばたの民」は、大学と地域を繋ぐためのサークルとして一昨年発足した団体です。地域で行われる行事への参加、下宿生の居場所づくりのためのイベント開催を主な活動としており、昨年度も多様な場で活動する機会を頂きました。

その中でも今回は井ヶ谷町内運動会について紹介します。40回目の記念大会となる今回の運動会は、愛知教育大学のグラウンド場にて開催されました。今までの開催場所は、町内にある井ヶ谷グラウンドでしたが、有事の際に避難所となる愛知教育大学が選ばれたそうです。

当日は、消防団の方による消火器火消し体験や防災〇×クイズ、防災グッズを取り入れた親子競技などのプログラムで大きく盛り上がりました。私たち「かきつばたの民」は、町内会の方と協力して競技準備をしたり、リレー競技に選手として参加したりしました。

1日を通して、自身の防災に対する意識が高まったと同時に、普段の大学生活では交わることのない地域の人々と交流を深めることができました。



ラグビー部の清掃活動について

ラグビー部／教育支援専門職養成課程 教育ガバナンスコース 4年／目 陽幸

私たちラグビー部は、毎週金曜日の朝の時間に大学内の清掃活動を行っています。このご時世の中、日々私たちが部として思う存分活動できているこの状況に感謝し、大学内の清掃をすることで少しでも恩返しができればと活動しています。また、大学内のゴミを少しでも多く減らし、自分たちも含む多くの学生が気持ちよく大学生活を送れるように清掃活動を行っています。

清掃活動には校舎内と校舎外の2種類があり、隔週で行っています。校舎内の清掃活動では、学生が授業を受けやすい環境作りを部員一人一人が心掛けており、各教室内を回りながら、机を並べること、机の中に忘れ物がないかを確認すること、床に落ちているゴミを拾うこと、そして見つかった落とし物を大学に届けることをしています。

校舎外の清掃活動では、学年ごとに大学内の決められた道を歩き、落ちているゴミを拾っています。傘などの大きなものからペットボトルや空き缶などの小さなものまで、様々な

ゴミを手分けして拾っています。今後は、ごみ拾いなどの簡単な作業に加え、駐車場の木の枝の除去や、落ち葉の収集など、より本学利用者が快適に過ごすことができるように、活動の幅を広げていきたいと思っています。

新型コロナウイルスの影響も少し落ち着き、大学に本来の活気が戻りつつあることは非常に喜ばしいことです。一方で、活動の幅に比例してごみなどが多くなっていることも、また現状です。

我々ラグビー部は、微力ではありますが、本学への感謝を、この活動を通してこれからも伝えていきたいと思っています。



大学からゴミを減らすきっかけを

愛知教育大学学生自治会／深田 翔

私たち学生自治会は、従来からクラブ・サークル、委員会などの課外活動団体の活動支援や、学生生活がよりよくなるための活動を展開している団体です。その中で、毎年、各団体の活動で出てしまう廃棄物を学生自治会が独自に回収する事業を行ってきました。

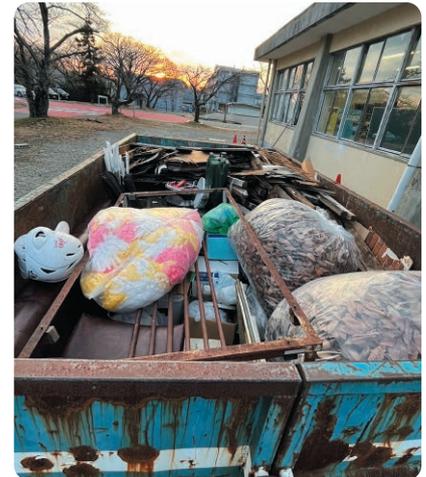
2022年度にも春季休業において、ゴミコンテナを設置してのゴミ回収を実施しました。コロナ禍で縮小されていたクラブ・サークル活動も徐々に活発になる中、構内のごみ処理が問題になっていました。普段、ゴミ回収を行う業者では処理できない大きな家電や器具が不法放棄されたり、団体内で放置されたりしていたのです。そのような現状を把握した学生自治会はWebフォームを活用し、廃棄したい物品と団体名を登録してもらい、需要をデータとして収集しました。このデータをもとにゴミ回収を行いました。

クラブ・サークルを始め、大学の研究室などからもゴミ廃棄の登録があり、ゴミコンテナ1台がいっぱいになるほどのゴ



ミを回収することができました。また、放置されているゴミを回収することもできました。写真の通り、大型の廃棄物が多く、廃棄する場が無いことを物語っています。

これからも学生自治会は大学にあふれたゴミを回収する事業を行います。未だ、構内には所有者不明の大型の廃棄物が溢れています。物を作り、使う責任を果たすことが出来なかった過去の残滓です。これらを見て、みなさんが責任を考えるきっかけになると嬉しいです。



生協学生委員会「社会組」の環境への取り組みについて

愛知教育大学生協学生委員会 (GI)

生協学生委員会では「環境組」改め、“社会問題や平和・環境問題”について考える「社会組」を設置し、理想に近づけるよう、現状に合わせて活動を行っています。

主に「ミンミリパック」の回収を行っています。ミンミリパックは回収率の低さを課題としています。特に令和3年度までは生協eM店での学食BENTOの丼を販売中止していたこともあり、ミンミリパックの存在を知らない組合員も多くいます。

しかし、今は学食BENTOの販売が再開していますので、ミンミリパックの回収箱を新しくして、ポスターを掲示するなどして、ミンミリパックの回収箱が設置してある場所を周知する取り組みを始めています。令和4年度のミンミリパック回収率は39%でしたが、今後は回収率が50%を超えるように、今後も取り組んでいきます。



生協eM店や第一共通棟などにポスターを掲示しています。

令和4年度の生協店舗・食堂での環境配慮の取り組みについて

愛知教育大学生協同組合

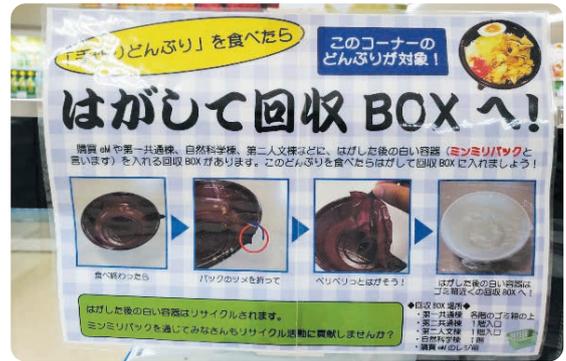
生協では、組合員の皆さんに食堂や店舗をご利用いただく中でも、環境に配慮した消費に参加できる仕組みづくりに取り組んでいます。

既に定着している主な活動は、レジ袋削減です。生協は、刈谷市のごみ減量化推進会議とともに「刈谷市におけるレジ袋削減に関する協定」を提携しており、購買店舗でのレジ袋配布は原則行っておらず、必要な方には有料（1枚5円）で購入いただいています。生協への声カードに「レジ袋を置いてほしい」という声をいただくこともありますが、レジ袋削減の目的で有料化していることをご説明し、環境配慮への理解、ご協力をいただけるよう回答しています。令和4年度のレジ袋購入者は1年間の来店数約25万9千人中、2,056人で、レジ袋辞退率は、99.2%となっています。

もう一つの日常活動は、購買コンビニで販売する丼パックの回収です。購買コンビニで販売する学食 BENTO という丼には、「ミンミ・リ・リパック」（通称 ミンミリパック）という再生・再資源化が可能な容器を採用し、リサイクル、省資源化に役立っています。令和3年度までは新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、利用が大きく減少しておりましたが、令和4年度は本格的に販売を再開し、利用が回復してきました。令和4年度は39%のリリパック回収率でした。生協学生委員会も「生協フェスタ」の機会などを利用してミンミリパックの回収を呼び掛けるなど、引き続き回収に努めています。

生協の日常の店舗運営でも、省資源、リサイクルの取り組みを行っています。令和4年8月より購買コンビニで使用しているプラスチック・フォークなどを環境に配慮したバイオマス製のものに切り替えました。

食堂で出る廃食は回収してリサイクルしています。廃食油はバイオディーゼルエンジンの燃料（BDF）としてリサイクルされ、トラックなどの燃料として利用されます。また学内の店舗や自動販売機で利用、排出されたペットボトルは、生協が回収し、リサイクルに活用していますが、その費用（環境協力金）は生協が負担しています。



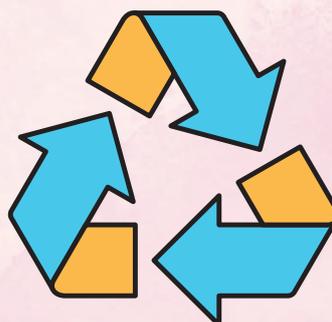
ミンミリパックのリサイクル方法を示すポスター



プラスチックなどをバイオマス製に切り替えたことをHPで案内しています。



食廃油からBDFを抽出



2

サステナブルキャンパスを 目指して



温室効果ガスCO₂抑制状況

本学の温室効果ガスCO₂排出量の抑制状況について報告をします。

本学では、省エネルギー機器の導入や啓発活動等により、中長期的に温室効果ガスCO₂排出量が減少傾向にあります。



温室効果ガスCO₂排出量の推移（過去6年間）

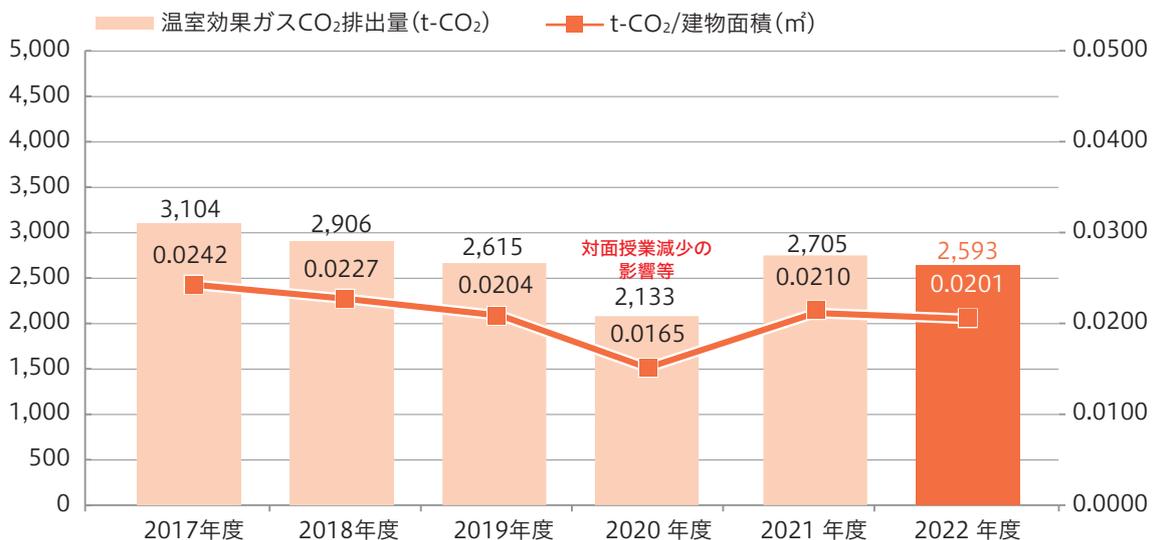


図 温室効果ガスCO₂排出量の推移（過去6年間）

主たる温室効果ガスである二酸化炭素（CO₂）の排出量は、6年間（中期）推移として減少傾向にあります。

2020年度は、遠隔授業の拡大（コロナウイルス感染症対策）等により、対面授業が減少したことに伴い、CO₂排出量が大幅に減少しました。

2021年度、2022年度は、通常授業の実施に伴う大学設備の利用増加の影響と、電力供給会社の変更に伴う二酸化炭素排出係数の上昇による影響があり、CO₂排出量は増加しましたが、「地球温暖化対策計画（2021年10月）」で示される目標値（2013年度比-51%）と比較した場合、2022年度においてCO₂排出量は約30%削減に至っています。



温室効果ガス CO₂ 排出量の低減対策状況と今後の展望



○省エネ機器導入の実績

建物の大規模整備（改修工事等）において、積極的に省エネ機器を導入、使用エネルギーを減らすことで、温室効果ガス CO₂ 排出量の抑制に取り組んでいます。

●建物の大規模整備（改修工事）



教育・人文棟（2019年5月完成）



自然科学棟（2021年6月完成）



美術・技術・家政棟（2022年1月完成）



養護・幼児棟（2022年3月完成）



保健体育棟（2022年3月完成）



音楽棟（2023年3月完成）

省エネ対策：【全室 LED 化】【全室高効率空調】【建物の断熱化】等
整備効果：整備前に比して 10～20% 程度の電気使用量を削減見込み

●省エネ機器整備（高効率機器への更新）

省エネ対策：【建物全館の LED 化】【高効率空調化】等



全室 LED 化



高効率空調への更新



太陽光発電の導入

●温室効果ガス CO₂ 排出量の抑制にかかる今後の展望

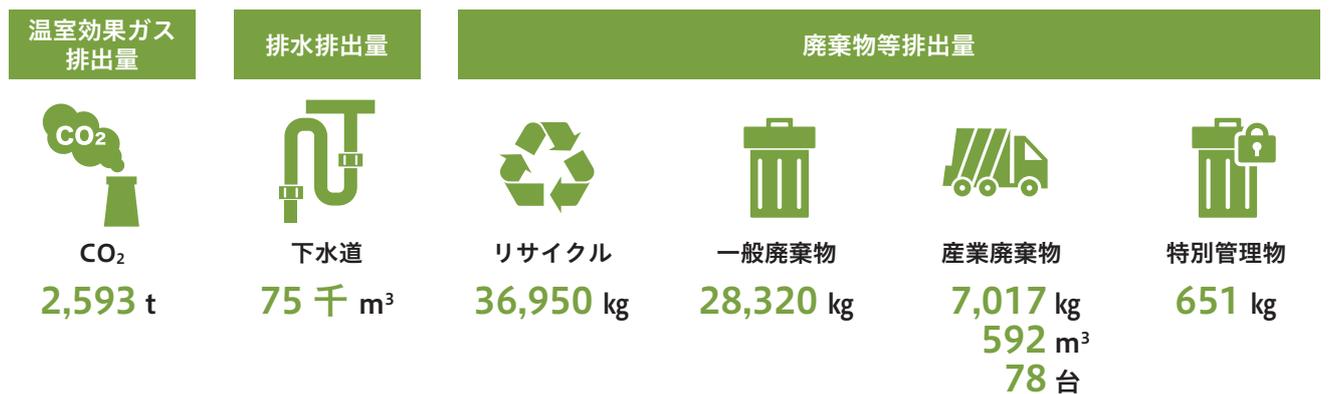
本学ではこれまでに、建物の大規模整備及び省エネ機器整備が概ね順調に進展し、CO₂ 排出量は 2013 年度比で約 30% 削減が達成できましたが、今後 2030 年度までにさらに同程度の CO₂ 排出量の削減が求められています。この達成には省エネ機器整備をさらに進めるだけでなく、太陽光発電設備の整備進展による「創エネによる CO₂ 排出量の削減」、また「カーボンオフセットによる CO₂ クレジットの購入」や「CO₂ 排出係数のより低い電気供給者との契約」など、経営面も含め多角的に CO₂ 排出量の削減について検討しスキームを導入していくことが必要です。

マテリアルバランス (環境負荷状況)

本学の事業活動（教育・研究・課外活動等）に必要な資源・エネルギー（INPUT）と廃棄・排出量（OUTPUT）との関係について報告をします。



マテリアルバランス

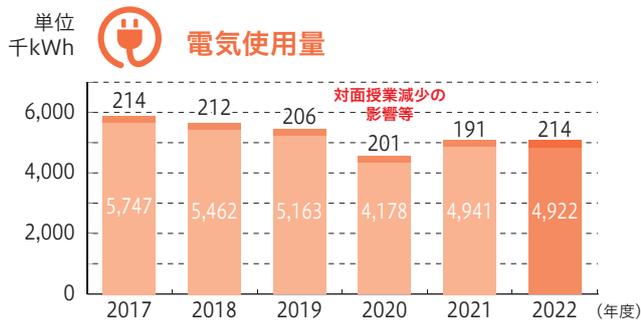
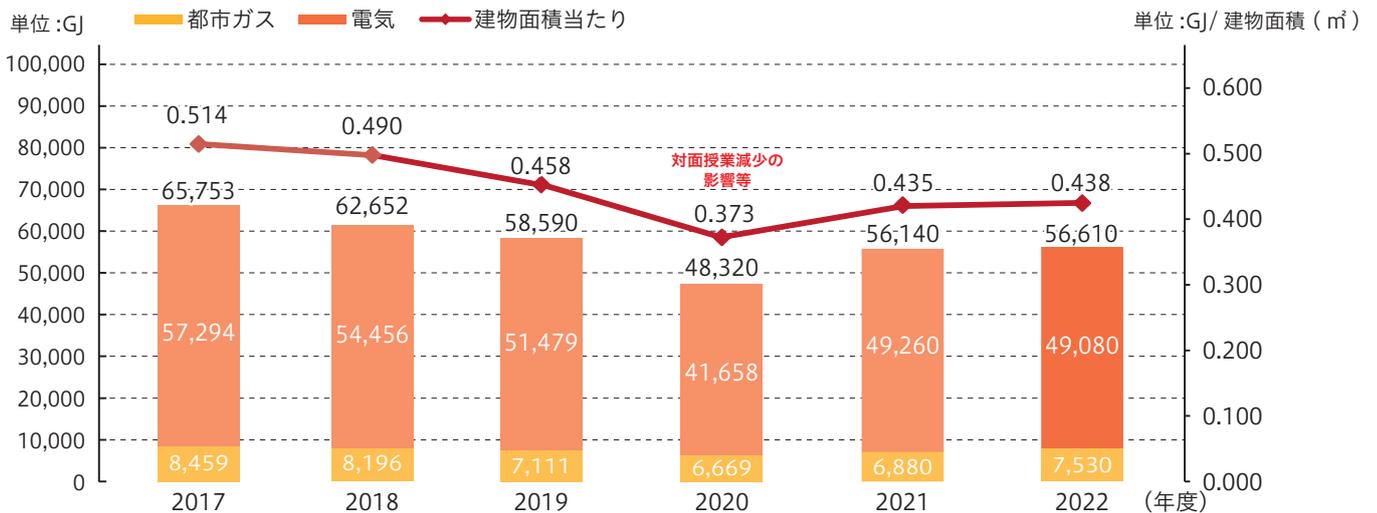


総エネルギー投入量の抑制

本学が、主に事業活動（教育・研究・課外活動等）で使用しているエネルギーは、電力・都市ガスになります。これらのエネルギー投入量について報告します。

本学では、省エネルギー機器の導入や啓発活動により、エネルギー投入量が、全体的に減少傾向にあります。

総エネルギー投入量の推移（過去6年間）



太陽光発電
214千kWh

5,136千kWhの内 214千kWhは太陽光発電による自然エネルギーです。

2015年教育交流館に太陽光発電 10kW を設置

2014年教育未来館に太陽光発電 10kW を設置

2013年本部棟に太陽光発電 12.5kW を設置

総エネルギー投入量の低減対策

- 省エネルギー型機器の導入
- 昼休みのパソコン電源オフ、帰宅時のプリンター等電源オフ・電源スイッチ付コンセントの利用
- 夏季における「クールビズ」、冬季における「ウォームビズ」の励行
- 冷暖房中の窓、出入口の開放禁止
- ブラインドやカーテンの利用
- エアコンフィルターの清掃
- 発熱の大きいOA機器類の配置の工夫
- 暖房便座のふた閉めの徹底、非暖房期には便座への通電は行わない
- 昼休み・夜間・休日は、業務上必要最小限の範囲を除き消灯
- 職員に対する階段利用の奨励
- 冷蔵する物品の量を適切な範囲にとどめる
- 夏季一斉休業
- 業務効率化による残業の削減

グリーン調達推進状況

本学では、環境物品等の調達等に関する法律（グリーン調達法）に基づき、環境配慮をした物品の調達に努めています。



グリーン調達状況

○グリーン調達の目標

環境物品等の調達の推進等に関する法律（グリーン購入法）に基づき、環境負荷の低減に資する製品等の調達の推進を図るための方針を策定し、調達率 100 パーセントを目標としています。

○グリーン調達の状況

本学のグリーン購入法による環境負荷低減の製品・サービスなど（特定調達品目）は、21 分野 280 品目となり、主な分野の調達量・達成率は、以下のとおりです。達成率は、すべて 100 パーセントになりました。今後もグリーン調達を推進していきます。

21 分野
280 品目

達成率
100%

○グリーン調達の実績（主要品目抜粋）

表 2022 年度主要品目グリーン調達実績

分野	品目	全調達量	特定調達品目調達量	調達率
紙類	コピー用紙	33,064.6 kg	33,064.6 kg	100%
	トイレットペーパー	3,673.7 kg	3,673.7 kg	100%
文具類	ファイル	20,556 冊	20,556 冊	100%
	事務用封筒（紙製）	127,381 枚	127,381 枚	100%
オフィス家具等	いす	352 脚	352 脚	100%
	机	317 台	317 台	100%
OA 機器	パーソナルコンピュータ	173 台	173 台	100%
	スキャナ	23 台	23 台	100%
照明	LED照明器具	4,048 台	4,048 台	100%
	電球形状のランプ	29 本	29 本	100%
インテリア・寝装寝具	カーテン	83 枚	83 枚	100%
役務	印刷	153 件	153 件	100%

水資源投入量の抑制

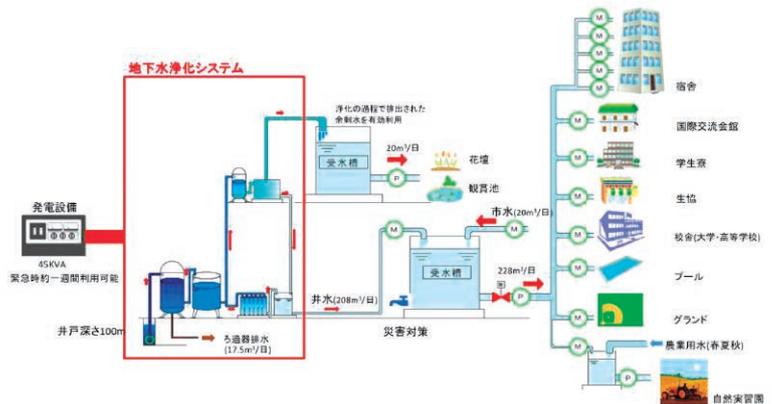
本学では、構内に井水プラント（高度浄化設備）を取り入れており、送水による電力を抑えた飲料水を供給しています。

本学では、市からの給水に加え、2011年度より構内に深井戸（地下100m程度）を掘り、その水を高度に浄化し飲料水とする井水プラントを整備しました。

なお、浄化の過程で、排水される水についても、構内2カ所の鑑賞池に放流するなどして、有効活用をしています。



井水プラント（高度浄化設備）



大学構内給水設備フロー図



水資源投入量の推移（過去6年間）

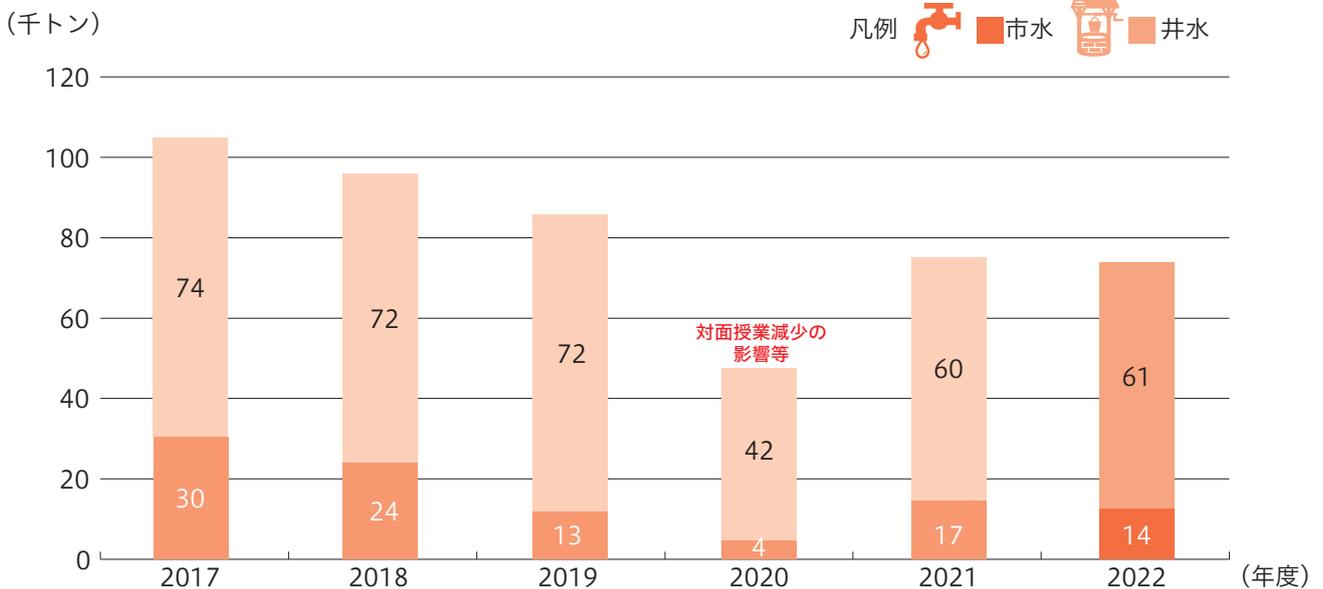


図 水質源投入量

本学の給水使用量は、トイレ等の節水工事や啓発活動、漏水監視により、年々減少傾向にあります。2020年度は、新型コロナウイルス感染症防止対策による遠隔授業等の影響で、一時的に減少しました。



廃棄物排出の抑制

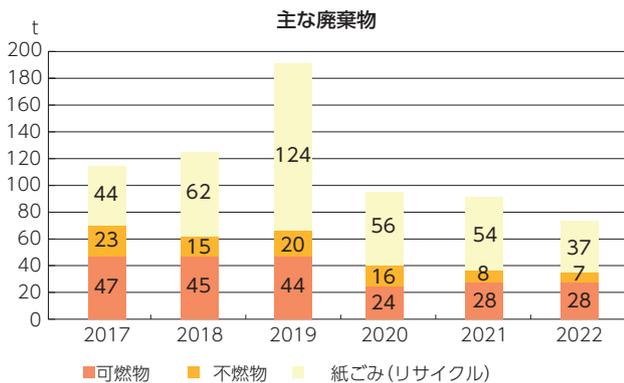
本学では、廃棄物排出抑制に努めています。廃棄物排出量の推移について報告をします。

発生抑制（リデュース）、製品及び部品の再利用（リユース）、再生利用（マテリアルリサイクル）、熱回収（サーマルリサイクル）を基本方針として、紙ごみ、ペットボトル、カン類及びビン類、蛍光管のリサイクルや、粗大ごみのリユースに努めています。



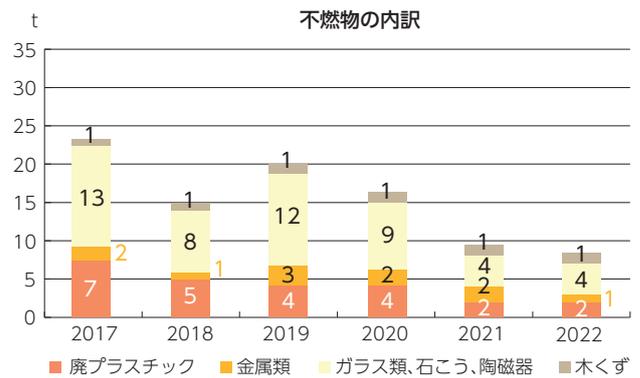
廃棄物排出量の推移（過去6年間）

〇ごみ排出量

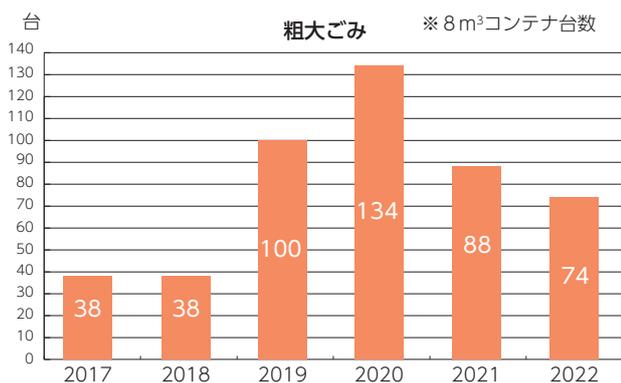


可燃・不燃物の排出量は、建物の大型改修工事に伴う引越作業により増減しますが、リサイクルできる紙ごみを分別したことにより、減少傾向になっています。

また、紙ごみの排出量については、増加する年度もありますが、リサイクルをすることで対応しています。



教育大学である本学には、美術・技術系の講座も設置されています。そのため、金属くず、ガラスくず、木くず等の排出が比較的多くあります。これらを分別したうえで排出し、最終的に金属原料、ガラス原料等になり、木くずは製紙原料や補助燃料として利用されています。



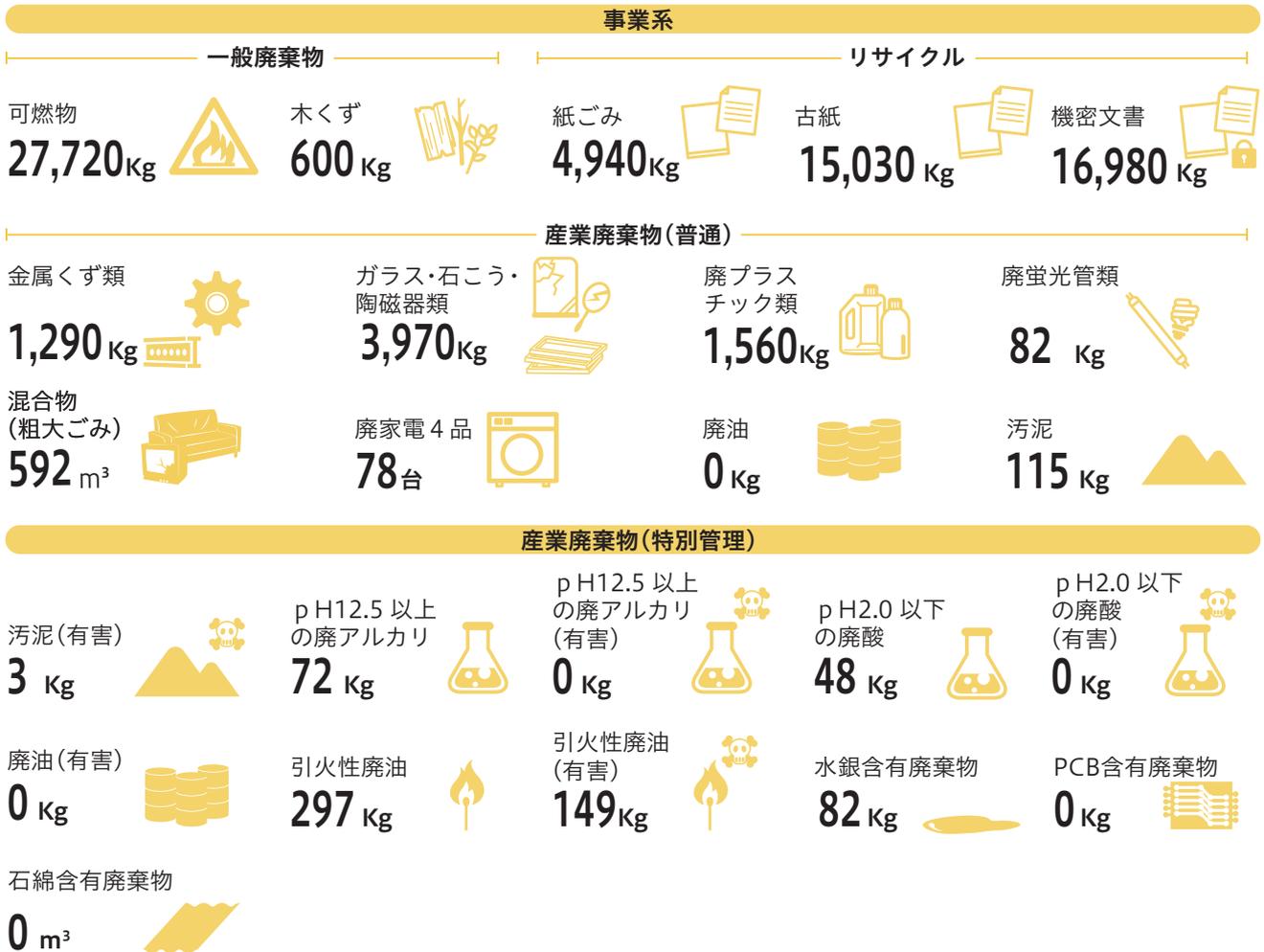
粗大ごみの排出量は、建物の大型改修工事に伴う引越作業により増減しますが、倉庫に一時保管するなど、必要に応じて処分しているため、年ごとの排出量にばらつきが生じています。



廃蛍光管の排出量は、蛍光管の寿命に大きく影響されます。蛍光管の寿命は約4～5年であり、廃蛍光管の排出量もそのサイクルで増減すると推測されます。建物整備時にLED照明へ更新しており、近年排出量が減少傾向になっています。

💡 廃棄物の内訳

○大学からの廃棄物（2022 年度）



※廃棄物は分別回収を行い、ごみの減量化対策を行っています、またリサイクル率を毎年増加させるように推進しています。
 ※廃棄物の処理及び清掃に関する法律施行令第二条の五に示す特定有害産業廃棄物にあたる場合は(有害)としています。

○低減対策等

発生抑制（リデュース）、製品及び部品の再利用（リユース）、再生利用（マテリアルリサイクル）、熱回収（サーマルリサイクル）を基本的な方針として対策を行っています。主な対策事例として下記の様な取り組みを行っています。

- ①紙ごみについては、古紙（売り払い）、雑古紙、機密文書・廃棄図書の種類に区分し、紙の状況及び性質に応じて排出リサイクルされます。また、学内において紙媒体にプリントアウトする場合は、両面印刷、集約印刷及び裏紙使用を推進し省資源化に努めています。
- ②ペットボトル、カン類及びビン類は、リサイクルのために分別したうえで排出しています。
- ③粗大ゴミは排出前に倉庫に一時保管し、物の状態に応じてリユースをしています。また廃棄物の適切な処理の促進に関する条例（愛知県）に基づき、法律遵守の観点から排出者の義務として、適宜、処分場において実地確認をしています。
- ④廃棄する蛍光管類は一カ所に集積したうえで排出し、最終的に水銀、ガラス原料としてリサイクルされます。

水質汚濁防止の取組状況

本学の排水は、関連法令（水質汚濁防止法・下水道法）及び自治体が定める水質基準に準じて、適切に管理をしています。排水管理状況について報告します。

○排水管理

本学の排水は、雨水系と排水系（汚水・雑排水・実験排水）に区別され、排水されます。実験排水を使用される主な建物において、中和処理設備やPH監視装置を整備し、常時管理をしています。

メインキャンパス（刈谷地区）の排水は、2016年6月まで構内の排水処理施設で浄化した後、河川へ放流していましたが、施設の老朽化により2016年7月からは、公共下水道に接続し、排水しています。



中和処理施設（pH常時監視）により実験系排水を管理

○排水管の改修工事

老朽化による排水管の破損等により土中への排水漏れが発生しており、2015年度より排水管のリニューアル工事を行っています。



本学の排水管改修工事の一例

○排水（水質汚濁物質）の分析結果

2022年度の水質測定結果（一部抜粋）は、以下のとおりとなります。基準値の超過はありませんでした。



大気汚染防止の取組状況

本学の大気汚染物質の排出は、関連法令（大気汚染防止法）が定める排出基準に準じて、適切に管理をしています。本学の大気汚染排出状況について報告をします。

○大気汚染物質排出管理

本学では、関連法令に該当する設備として、講堂と第一福利施設の大型空調設備（冷温水発生機）となりますが、定期的に測定・分析（ばい煙）を行い、適切に管理をしています。

大学キャンパス（刈谷地区）の空調設備は、ボイラー設備によるセントラル式暖房をしており、多くのばい煙を排出していましたが、2015年度に個別空調設備（エアコン）に移行することで、ばい煙発生を抑制することができました。



※本学のばいじん、窒素酸化物、硫黄酸化物は、計測値



冷温水発生機（講堂）

化学物質取扱及び管理状況

本学の化学物質は、主に実験実習や研究用で使用しています。関連法令（毒物・劇物取扱法・PRTR法・労働安全衛生法・消防法・廃棄物の処理及び清掃に関する法律・水質汚濁防止法）にしたがい、適切に管理・処分をしています。化学物質の取扱及び管理状況について報告をします。

愛知教育大学では、毒物及び劇物取締法、PRTR法、労働安全衛生法、消防法、廃棄物の処理および清掃に関する法律、および水質汚濁防止法について対象とした化学物質管理規程に基づき、環境リスク・安全リスク・健康リスク低減を目指した化学物質管理を行っています。化学物質管理規程に基づき、化学物質管理支援システム TULIP を活用しています。2022年度も、2020年からの新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、消毒用エタノールが（80%程度）が2 t 超使われましたが、実験実習棟の改修工事の影響も加わり、化学物質を取り扱う教育研究活動に自粛傾向が見られました。本頁では、2022年度の取扱量（kg）の上位5物質（消毒用エタノールを除く）について、過去5年間の学内取扱量とともに掲載しました。また、他大学からの指摘を受けて、燃料用の重油等に含まれるPRTR法指定化学物質について5年さかのぼって調査を試みたが、2016年にボイラー室の撤去工事を行っており行政への修正届出は不要と確認できました。

表 化学物質取扱及び管理状況

(kg)

名称	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	労働安全衛生法	消防法	毒物及び劇物取締法	PRTR法
酢酸エチル	108	153	58	5	53	85	第二種有機溶剤 名称等を通知すべき物質	第四類危険物 第一石油類非水溶性液体	劇物	—
メタノール	198	218	127	11	61	52	第二種有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	第四類危険物 アルコール類水溶性液体	劇物	—
クロロホルム	119	176	81	7	54	44	特定第二類物質 特別管理物質 特別有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	第9条貯蔵の届出を要する	劇物	第一種指定化学物質
n-ヘキサン	149	102	63	2	38	37	第二種有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	第四類危険物 第一石油類非水溶性液体	—	第一種指定化学物質
ジエチルエーテル	18	7	1	1	2	22	第二種有機溶剤 名称等を通知すべき有害物	第四類危険物 特殊引火物	—	—

PCB含有廃棄物の管理状況

本学のPCB含有廃棄物は、主に電気設備や実験機器内で使用されており、関連法令（ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法）にしたがい、適切に管理・処分をしています。

PCB含有廃棄物の管理状況について報告をします。

高濃度PCB含有汚染物は、2022年度までの処分とされており、本学では、該当する電気設備（変圧器・コンデンサー）について2021年度に処分を行いました。

低濃度PCB含有汚染物については、2027年度までの処分とされており、発見次第適切に処分を行います。

水銀含有廃棄物の管理状況

本学の水銀含有廃棄物は、主に電気設備（蛍光灯）や実験機器内（温度計・気圧計）、実習用品（顔料）で使用されており、関連法令（廃棄物処理法）にしたがい、適切に処分をしています。

本学の水銀含有廃棄物の管理状況について報告をします。

2022年度は、82kgの水銀含有廃棄物を適切に処分を行いました。

美化活動・啓発活動

花プロジェクトやキャンパスクリーンデイなど、キャンパスの美化活動について報告をします。



キャンパスクリーンデイ

美化活動の一環で、全学的に教職員と学生が参加する清掃を行っています。

「キャンパスクリーンデイ」はキャンパス内の美化活動の一環として、毎年オープンキャンパス前の時期に大学内の清掃活動を実施しています。2022年度は6月29日（水）の実施となり野田学長をはじめ、理事や教職員・学生の約980名の参加者によりごみ拾いや草刈り、側溝の落ち葉拾いなどを行いました。当日は夏本番という厳しい暑さのなかでの作業となりましたが、作業を分担するなど参加者個々の屋外の活動時間を短縮して、参加者の体調に配慮しながら実施しました。



第一共通棟付近の清掃風景



清掃活動に参加する野田学長



花プロジェクト

美化活動の一環で、教職員と学生による花壇の花の植替えを行っています。

「花プロジェクト」は2012年から、大学構内の環境美化の一環として取り組み始めた活動で、今回で22回目となりました。2022年度はキャンパスクリーンデイ終了後に、有志職員によりAUEスクエアと附属図書館前の花壇で実施しました。野田学長をはじめ教職員・学生約30名でサルビア、マリーゴールド、ペゴニアの3種類の花の植替えを行い、植え終わった後は紫や黄色、赤、白、ピンクの花が並び、夏らしい彩り豊かな花壇となりました。

7月23日、24日に開催されたオープンキャンパスではきれいになったキャンパスで、来学の方をお出迎えすることができました。



野田学長と有志学生による植栽の様子



附属図書館前花壇の植栽の様子



省エネ啓発活動

トイレや流し台の人目のつく場所には、燃料価格高騰による節電の呼びかけとして「緊急節電対策」ポスターを夏季と冬季に掲示し、省エネを呼びかけました。また夏季は軽装を励行し、地球温暖化防止及び省エネルギー対策に寄与しました。

執務室での軽装を励行中です

実施期間：5月1日～10月31日

地球温暖化対策・省エネルギー対策の一環及び業務効率向上のための取組みとして行っています。

愛知教育大学

緊急節電対策中

警告 燃料価格高騰により、本学の電気料金が大幅増加中

夏期節電対策

- 01 部屋の退室時、OA機器と照明、エアコンOFF確認
- 02 エアコン稼働時、室内温度28℃確認
- 03 晴天時、窓際照明OFF確認
- 04 ブラインド活用でエアコン効率UP
- 05 利用人数にあった部屋の選択でエアコン効率UP
- 06 可能な限り、「早期帰宅」!
- 07 クールビズ
- 08 エレベータの利用を控える

4076-2300(内線1) 財務・学務部 施設課

緊急節電対策中

警告 燃料価格高騰により、本学の光熱費が大幅増加中

冬期節電対策

- 01 部屋の退室時、OA機器と照明、エアコンOFF確認
- 02 エアコン稼働時、室内温度21℃確認
- 03 晴天時、窓際照明OFF確認
- 04 利用人数にあった部屋の選択でエアコン効率UP
- 05 可能な限り、「早期帰宅」!
- 06 ウォームビス
- 07 エレベータの利用を控える

4076-2300(内線1) 財務・学務部 施設課

その他の活動

教職員が、教育や研究を進めるうえで基盤になる、安心・安全な職場づくりの取組について報告をします。

労働安全衛生

教職員が、安全で健康に働ける職場づくりは、充実した教育・研究活動の基礎です。本学は、教職員が快適に安全に働くことができる大学づくりを目指して、衛生管理者養成、健康診断、ストレスチェック、喫煙、メンタルヘルス、職場巡視、作業環境測定、労働災害率に関する改善等に取り組むために労働安全衛生活動計画を策定しました。

また、本学における労働災害発生状況の推移は表のとおりで、2022年度の労働災害は、休業災害0、不労災害10人で、労働災害度数率は7.58、強度率は0でした。2022年度の全産業の度数率（不労災害も含む）は、2.06、強度率は0.09で、本学は、強度率は全産業より低値という結果となりました。災害発生について原因を調べ、再発予防措置を講じ、災害発生数の減少を目指します。



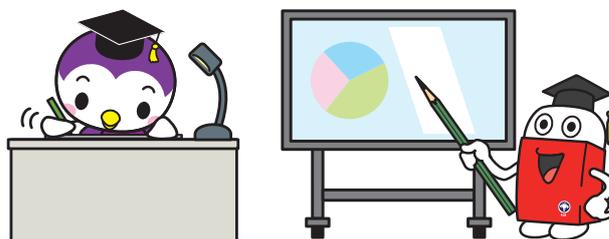
表 労働災害発生状況

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
休業災害	0	0	0	0	0	0
不労災害	5人	5人	5人	7人	5人	10人
災害合計	5人	5人	5人	7人	5人	10人
労働災害度数率（*）	3.79	3.79	3.79	5.30	3.79	7.58
労働災害強度率（**）	0	0	0	0	0	0

（注）*は百万延べ労働時間当りの労災人数。**は千延べ労働時間当りの労災休業延べ日数

人権及び雇用

ハラスメント規程を定め、人権侵害に関する相談窓口を設けて、担当者が相談を受けています。2022年度の相談は3件、ハラスメント防止委員会での審議は0件であり、関係者の処分は0件でした。障害者の雇用は常勤5人、非常勤5人で、能力を活かした就労ができるように積極的に進めています。



環境配慮の仕組み

本学の環境保全の推進体制について報告をします。



推進体制



本学では、環境保全の責任者（学長）を配置し、事務局及び委員会にて実務を進め、実行力ある体制づくりで環境保全にあたっています。



法令遵守状況

法 令	大学の規程等	大学の具体的な活動内容
【環 境】 <ul style="list-style-type: none"> ●環境配慮促進法 ●環境配慮契約法 ●地球温暖化対策の推進に関する法律 ●エネルギーの使用の合理化等に関する法律 ●グリーン購入法 	エネルギーの使用の合理化に関する規程	<ul style="list-style-type: none"> ●環境報告書の作成・公表 ●環境活動の実施
【水 質】 <ul style="list-style-type: none"> ●水質汚濁防止法 ●水道法 ●下水道法 	水質汚濁防止規則 化学物質管理規程	<ul style="list-style-type: none"> ●毎週・窒素及びリンの測定（井ヶ谷地区） ●BOD 毎月測定
【大 気】 <ul style="list-style-type: none"> ●大気汚染防止法 		<ul style="list-style-type: none"> ●ばい煙測定（Nox・Sox・ばい煙等）
【騒音・振動】 <ul style="list-style-type: none"> ●騒音・振動規制法 		<ul style="list-style-type: none"> ●冷凍機等設備（送風機）の届出 ●建設工事時に低騒音型重機の使用
【廃棄物】 <ul style="list-style-type: none"> ●廃棄物の処理及び清掃に関する法律 ●ダイオキシン類特別措置法 ●ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法 ●水銀汚染防止法 	化学物質の廃棄物処理規則 化学物質の廃棄物処理細則 化学物質管理規程	<ul style="list-style-type: none"> ●特別管理産業廃棄物管理責任者の選任 ●産業廃棄物・特別管理産業廃棄物のマニフェスト管理及び報告 ●PCBの適正保管及び適正処分 ●処理業者の調査票を作成し適正業者の選定 ●処理施設の現地調査実施 ●ごみ分別の徹底・卒業時のごみ対策 ●廃棄物担当職員への安全講習会の実施
【防災・防火・危険物】 <ul style="list-style-type: none"> ●大規模地震対策特別措置法 ●消防法 [危険物の規制に関する政令] 	防災・防火管理規程	<ul style="list-style-type: none"> ●（年1回）防災・防火訓練時に消防設備の説明 ●備蓄倉庫の点検 ●大学祭模擬店への燃料安全指導 ●危険物屋内貯蔵所の安全管理
【放射性物質】 <ul style="list-style-type: none"> ●放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律 ●核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律 	エックス線等障害予防規程 核燃料物質計量管理規程	<ul style="list-style-type: none"> ●講演会の実施 ●健康診断の実施
【高圧ガス】 <ul style="list-style-type: none"> ●高圧ガス保安法 		<ul style="list-style-type: none"> ●ボンベ管理の強化
【実 験】 <ul style="list-style-type: none"> ●遺伝子組換え生物等の使用等の規制により生物の多様性の確保に関する法律 ●動物の愛護及び管理に関する法律 	遺伝子組換え実験安全管理規程 研究倫理規程 動物実験規程	<ul style="list-style-type: none"> ●封じ込め状況の確認 ●二種使用についての審査
【安全衛生】 <ul style="list-style-type: none"> ●労働基準法 ●労働安全衛生法 ●学校保健安全法 	安全衛生管理規程	<ul style="list-style-type: none"> ●産業医・衛生管理者の構内巡視・施設改善 ●アスベスト含有建材のリスク管理、及び適正撤去 ●附属学校のVOC測定支援 ●自律的な化学物質管理の推進
【化学物質】 <ul style="list-style-type: none"> ●消防法 ●毒物及び劇物取締法 ●労働安全衛生法 ●PRTR法（特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律） ●農業取締法 ●水銀による環境の汚染の防止に関する法律 ●国民保護法 	化学物質管理規程 化学物質管理支援システム取扱要項	<ul style="list-style-type: none"> ●化学物質管理に関する調査（毒物・劇物等） ●化学物質管理支援システムの運用推進 ●化学物質管理に関する調査及び講習会の実施 ●化学物質リスクアセスメントの実施 ●爆発物原料等の適正管理 ●自律的な化学物質管理の推進

環境報告書ガイドラインとの対照

本学発行環境報告書と環境報告書ガイドライン 2018（環境省）とを比べ、適切な表記・記入がされているか確認をします。

頁	環境報告書2023	環境報告ガイドライン(2018年度版)による項目
表紙	目次	【1】 1. 環境報告の基本的要件
1	学長メッセージ	【2】 1. 経営責任者のコミットメント 【2】 7. 長期ビジョン 【2】 8. 戦略
2	沿革の略図	
3	各キャンパスの所在地・概要	【2】 5. ビジネスモデル
4	運営組織	
5		
【1】 教育大学としての特色を生かした環境活動		
6	Pick up	
7		
8	大学教員の取組	
9		
10	附属学校園の取組	【2】 3. ステークホルダーエンゲージメントの状況
11		【2】 9. 重要な環境課題の特定方法 【2】 10. 事業者の重要な環境課題
12		【3】 3. 生物多様性
13	学生の取組等	
14		
15		
【2】 サステイナブルキャンパスを目指して		
16	温室効果ガスCO ₂ 抑制状況	【1】 2. 主な実績評価指数の推移
17		【2】 7. 長期ビジョン 【3】 1. 気候変動
18	マテリアルバランス(環境負荷状況)	【2】 6. バリューチェーンマネジメント
19	総エネルギー投入量の抑制	
20	グリーン調達の推進状況	【2】 6. バリューチェーンマネジメント
21	水資源投入量の抑制	【3】 2. 水資源
22	廃棄物排出の抑制	
23		【3】 4. 資源循環
24	水質汚濁防止の取組状況 大気汚染防止の取組状況	
25	化学物質取扱及び管理状況 PCB含有廃棄物の管理状況 水銀含有廃棄物の管理状況	【3】 6. 汚染予防 【3】 5. 化学物質
26	美化活動・啓発活動	
27	その他の活動	【2】 10. 事業者の重要な環境課題
28	環境配慮の仕組み	【2】 2. ガバナンス
29	環境報告書ガイドラインとの対照	【2】 4. リスクマネジメント



国立大学法人

愛知教育大学

Aichi University of Education

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

<https://www.aichi-edu.ac.jp/>

施設課 Tel.:0566-26-2153

E-mail kankyo-h@m.auecc.aichi-edu.ac.jp